慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゴータイン氏 独逸保護関税影響論
Sub Title	
Author	堀江, 帰一
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.3 (1910. 3) ,p.361(139)- 364(142)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新著紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100315-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を死用するの傾向を生ずるを以て、各銀行が平時に於て任意に準備金の增加に心掛くる事肝要なる可く、斯くして初めて此弱點を匡正するを得るなり。最も準備金增加の爲めには銀行預金の無利子收受の必要ある可し、其必要は千八百七十三年の恐慌後、紐育交換所委員會の報告に於て主張せられたれども、不幸にして所謂進取的銀行業者の爲めに保守に過ぐるものとして排斥せられたり、加ふるに無利子預金の收受は、他銀行をして普通利率に於て運用ずる事能はざる遊資を、屢々紐育其他の都市に預託するの風を生ぜしめ、我金融市場より不健全なる投機心を驅逐し、資金の蓄積を可能ならしむるの利益あるに於てをや。

＊　＊　＊　＊

以上記述する處を概括するに、米國に於ける支店制度の缺乏は、中央銀行をして國庫金の運用及び紙幣の伸縮を自在ならしむる能はず、又中央銀行をして金融上の病症を救濟する適宜の機關たらしむる能はざるなり。思ふに米國金融市場に蹉跌を來す原因は米國特有のものにして、彼の投機事業の如き全く銀行業支配の圏外に立つと云ふ可し最も株式受渡日の如き定期に改むる事能はざるに非ざるも、米國銀行業に取りて最も緊切なるは銀行が他銀行の預金を收受するの責任を自覺し、恐慌時に於ける政策を能く認識して、平時に於て多額の準備金を用意するか、或は此方策にして不可能なるに於ては、他銀行が準備市銀行に預託し得る資金の割合を低減せしむるかにあり、固より預託の割合を以て敢て過剩なりと云ふに非ざるも、市中銀行が屢々支拂停止を行ふより見れば、準備金は恐慌に際して實効を奏せざるが如く、隨て一般不信の情は銀行の支拂能力如何に懸るに非ずして、斯る金融逼迫に際して能く資金の融通を求め得るや否やに在るを以てなり。米國に於て、恐慌に際し、一般市場に恐怖の念を與へ、周到着實なる預金者が預金を引出し、或は投機的預金者が通貨打歩の利益を占めんとして預金を取付くるが如きは、全く銀行業者が支拂停止を頻繁に行ふ結果

に外ならず、要するに銀行業者が其壓抑に堪へ得るの能力を養はんか少くとも米國特有なる此種預金の取付を防ぐを得べし。固より非常時の紙幣發行に對して、或る設備を爲すは肝要にして吾人の拒む處に非ざれども、最も必要缺くべからざるは銀行業者が能く其準備金の目的を理解し、平時に於て多額の準備金を保有し、一朝事變に際して巧に之を運用ずる事卽ち之れなり。(完)

以上スプレーグ氏の論文は啻に米國經濟社會の時事問題を解決したるのみならず、金融市場に於ける中央銀行の地位、割引政策の効果等一般の問題に對して說明評論の重んず可きものあり。原著者は今、華聖頓府に居り通貨問題調査委員會の專門委員として寄與しつゝあり。本論に述ぶる所果して如何なる程度まで委員會の議決を動かすやは他日を以て之を檢せんのみ。松田君の譯文頗る要を得たり。余は唯原文と對照して三四の字句に訂正を加へたるに過ぎず。

堀江　歸一　附記

新著紹介

ゴータイン氏獨逸保護關稅影響論

Georg Gothein-Die Wirkung des Schutzzollsystebms in deutschland. Volkwirtschaftliche Zeitfragen. Heft 243144.

千九百六年獨逸が現行關稅定率を施行し、保護政策殊に農業保護の政策を取れる結果として、國民經濟上に如何なる影響を及ぼしたるや。此點に就て的確なる論斷を聞き、詳密なる說明を得ることは、內外國民の希望して已まざる所なり。本書の著者ゴータイン氏は帝國議會の議員なるが、一方には自由貿易論者として、學問界にも重きを置かるゝの人なり。本書は緖論と結論との外に、農業關稅と農業の發達、保護關稅と工業の發達、保

護關稅に依り資本放下の道を誤まりて、獨逸の蒙れる損害、生活資料に對する課稅に依る國民健康上の損害、關稅政策の金利に及ぼせる影響、保護關稅政策の財政上に於ける作用等の六章に分たる。著者は開卷壁頭に於て獨逸關稅政策と國勢變遷との關係を叙述し、「獨逸の大地主は往年獨逸が穀物輸出國たりし間は自由貿易を支持したるが、千八百七十年代に入りて、內國に於ける人口增加の爲めに、穀物輸入國となり、然も鐵道運輸の開發幷に海運賃率低減の結果として、世界市場に於ける穀價に下落を來すや、狀況一變し、曩に土地に放下したる資本に依て多くの利益を得たる大地主は漸く不利益の地位に陷りて、保護の必要を認め、又始め穀物課稅に依て賃銀に不良の影響を及ぼすことを恐れ、之に贊成せざりし工業家も工藝品課稅に依て、自家の頭上に利益の及ぶを思ひ、相率ひて保護政策の施行を促すに至れり」と判斷して、(五—六頁) 獨逸保護政策の由來を明にし、進んでカプリヴヰ時代に於ける關稅政策を論じ、穀物關稅は大規模農業を經營する者のみを利益し、小農の如き自己の耕作する以外に、穀物、麥粉、麵麭、秣を購ひ、鷄卵野菜を買ふ者は農業關稅に依る物價騰貴の爲めに損害を蒙る可し」とし(九—一〇頁) 此事實を明瞭ならしむる爲め獨逸に於ける耕地分配の沿革並に現狀を叙述し、「稅率の增加は其影響を地價並に小作料に及ぼせるが、然も高價を拂ひて土地を買入れたる新地主又は高き小作料を約したる賃借人は暫時にして耕作が生產費を償ふに足らざることを認むるに至れり」とし(二一頁) 然も食料品の價騰貴して、賃銀高貴に赴かんとするや、東部北部に於ては低廉なるガリシア人波蘭人を移入して勞働に當らしむるが故に、却て賃銀を低落せしめ、人民を都會に驅逐するが故に、人口の都會に集中するを防遏せんとする保護關稅は所期と正反對の結果を現はすに至らんとすとし、(二一—二二頁) 保護關稅の行はるゝに拘はらず、外國移住民の多きことを指摘したり。

次に保護關稅と工業發達との關係に就て、著者は世間保護論者が近年獨逸の工業界に於て學術上の新工風、技術上の新發明が工業に應用せられて、生產技術を改良し、以て事業の發達を促したることと大なるものあるに拘はらず、毫も之を認めずして、一意工業發達の原因を關稅保護に歸するの愚なるを指摘し、製鐵業に就て技術上の說明を試み、進んで製鐵業が保護關稅の助力に依り、カールテル、トラスト又は大規模合同を行ふの弊害を述べ(二七—三〇頁) 千九百三年十一月十四日の鐵並に鋼鐵業雜誌より獨逸製鐵業のダンピングに就て引抄したり。保護關稅が資本放下の狀況に及ぼしたる影響、利子步合に對する關係等に就ては、論題の性質上議論聊か透徹を缺くの嫌なきを得ずと雖も、保護關稅と國民健康との關係に就ては、最も正確なる統計を基礎として論ずる所あり。(四二頁以下) 保護關稅の財政に及ぼせる影響に就ては最も明快なる議論を試み、左の如く論斷したり。

ビスマルクが最初關稅政策の方針を更定するや、關稅の收入を增加し、帝國財政の基礎を鞏固ならしむることを以て、其目的としたり。然も此目的は達せられざりき。固より關稅の收入は大に增加し、千八百七十九年と千九百七年とを比較するに、一億四千萬馬克より七億馬克に達したるが、此增加の大部分は保護政策と全く關係なき收入關稅より生じ來れるものなるのみならず、奢侈品に就ては、保護稅政策に依る生活費增加の爲めに却て減少したるを見る。蓋し食料品の如き絕對的必要品の時價にして騰貴せんか、多數の人民は間接消費稅收入の源泉たる貨物に對して消費する所少なきに至る可きを以てなり。之に加ふるに帝國聯邦州政府、市政府が官公吏に與ふる俸給も生活費增加の爲めに、增進し來り、年額二十億馬克の經費增加を要するに至れり。獨逸が再び自由貿易の制度に復歸するは、財政上の必要に屬す。(五七—六〇頁) 要するに著者が商業政策上に懷抱する意見は頗る正確なりと云ふ可し、一部圖陋の輩は之を排斥

す可きも、事實を基礎とせる議論は容易に之を動かす可からず。我輩は保護關稅論に熱中し、心醉して殆ど他を顧みざる我國一部の人士に向て、獨逸保護政策の効果を論じ、其利益を喋々する以前に、先づ本書を一讀することを勸告するものなり。（堀江歸一）

アツシユレー氏註ミル氏經濟原論

Principles of Political Economy. By John Stuart Mill. Edited by W.J.Ashley. pp.XX-XI 1013. Longmanns &co. 1909.5s.

ミル氏經濟原論は出版後既に六十餘年を經過したれども、尙ほ經濟學研究者の一讀を要する書籍の一として、世間に重要視せらる。唯從來行はれたる版本中ライブラー、エヂシヨンは高價にして一般讀者に適せず、ポピユラー、エヂシヨンは字體小にして、繙讀に便ならざるの缺點を免かれざりしのみならず、最近二三十年間に於ける經濟學說の發達はミル氏の所說に幾多修正を加ふるの箇所を生じたり。先年米國のラフリン敎授が刊行したるミル氏經濟原論の如き如上の不便を除き、又如上の必要に應ずる爲めに出でたるものなりしが、何故か世間に行はるゝに至らず、今日に於て殆ど多數の研究者に忘却せられたるが如し。今、アツシユレー氏註ミル氏經濟原論を見るに、氏は決してラフリン氏の如くミル氏の原文に對して大膽なる加除訂正を加へず、前後幾多の版本に於てミル氏の說明の異なれる點を附註し、千八百四十八年初版發行後若干年間に於てミル氏の學說に如何なる變化を現はしたるやを明にするに勉めたり。而してアツシユレー氏自身緒論二十六頁を起草し、專らミル氏自叙傳に基き、ミルとベンタム、ヂエームスミル、コムト等思想上の先輩との關係を叙述し、ミル氏の所說に變動を來さしめたる所以を知るに便せんとしたり。是れ亦有用の文字たるを失はずと雖も、本書中最もアツシユレー氏の功勞大なりと認む可きは、卷末に付したる二十四頁に亘る參考書解題にして、經濟原論研究上の重要項目三十九を擧げ、各項目に就て、ミル氏經濟原論の關係部分と併讀す可き書目並に雜誌論文を、指示し、間々書籍論文の性質をも說明したり。アツシユレー氏がハーヴアード大學に於て經濟史の講座を擔任し、又英國經濟史に就て有名なる著述あるは、人の知る所なるが、氏は前年トロント大學に於て、近年バーミンガム大學に於て經濟史以外、幾多經濟學に關する講義を爲し、各方面に普遍せる知識を有する人なるを以て、其經濟原參論考書目の選擇解題を爲すが如き事業には、最も適したりとす可く、殊に社會主義、賃銀基金の兩項に於ては、名を參考書解題に藉りて、堂々たる議論を試み、人口の異動、十九世紀に於ける物價の兩項に於ては、有益なる統計を添付したり。參考書中千九百九年出版の書籍、政府出版物、雜誌論文を見るに於ては、氏の勞大なりとす可し。要するにアツシユレー氏の云へる如く「此書籍は今後永く繙讀せらる可く、又其價値ありとす。其十九世紀に於ける知識上の歷史中興味ある方面を代表するは論なしと雖も、其特色は歷史以上の點に在り。或る點に於ては、今日に於ても英書中之に勝るものを見ず、又他の點に於ては、本書を出發點として、更に研究を進むるを便とす」るは何人も否認せざる可し。評者は未だミル氏の原論に接せざる人に向て本書を推薦すると同時に、ミル氏原論を讀むと否とに拘はらず、經濟學研究者が本書卷末參考書解題を一瞥して、アツシユレー氏の苦心を空しふせざらんことを望む。（堀江歸一）